

春園集卷一

本  
203  
1

18  
203  
1





六  
203

世錄

也

振鷺亭先生著

桂林堂藏

春日夏秋冬  
五卷

春夏秋冬二十卷。輒振鷺先生所著也。且春篇五卷脫稿。嗣篇至再至三。令讀者無倦實奇文通靈妙趣傳神間亦加圖畫以形容矣。雖書不盡言。言不盡意。其畫亦殆盡焉。描寫一陽齊豐國所筆也。請攬全本以可見師之神妙云。東都書坊桂林堂主人識。

三通鼓角四夏雞

日色高升月色低

時序秋冬又春夏

舟車南北復東西

鏡中不第人顏老

世上參差事不齊

若向其間尋穩便

一盞濁酒一餐蔬



唐伯虎題

東坡



春日之卷

春夏秋冬自序

咎郭熙嘗著山水論曰春則豔  
冶如咲夏則蒼翠如滴秋則明  
淨如糝冬則慘淡如睡語豈非  
浪說也余偶遊覽武州金澤感  
春想秋欲使蒨蕤語其地之山  
水蒨蕤復請使余語江都之劇  
場余固不知劇場頓以為此一

學東

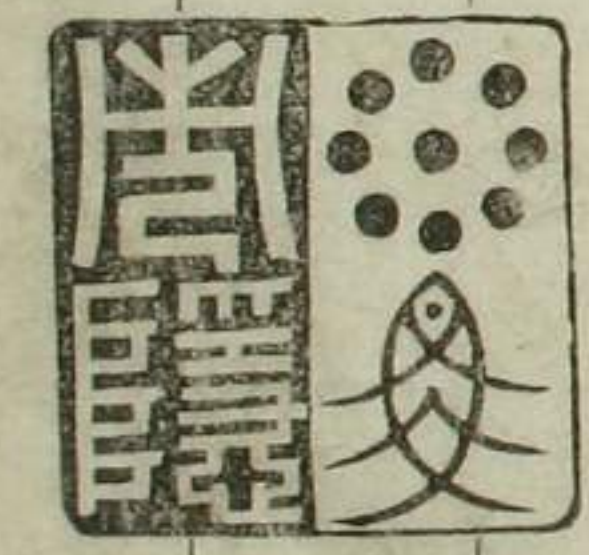


出戲資其口譚蓋應兒輩所好耳。題曰春夏秋冬皆趣之所在。雖無復序引之可徹。能俾觀者如目擊歌舞也。此雖特為獎飾戲謔。然有所喚醒俗子而盡情亦何害為浪說哉。曩昔孔翁猶有所戲詩曰。善戲謔。今不為虐。今作者在焉。一日書肆來需稿。

於余曰。屬者稗史行于世。有是哉事之奇也。蓋傳之上。東矣。於是休暇。舐筆。遂序以授焉。

文化三曆舍丙寅春正月

東都 振鷺亭主人





春あゆん夏か秋あき冬ふゆ春篇あゆん總目のぞく

振鷺亭主人 編次

一之卷

第一齣

江之嶋えのしまみ艷あざ之の佑すけ書画會あやがのかい戎闘あやむを  
七里濱あちりがたぬ小濱瀨夫人こませ あいじん風流ふうりゆうを競あそす  
義ぎ不憑よて高麗四郎こうらいしやう深窓しんそうと謀まる  
身み戎あやむ抛なて艷あざ之の佑すけ闘あやむ諍あやむ戎あやむ促あせす

第二齣

二之卷

第三齣

百ひやう緑りよく長ちやう者しやう鞠まを誥あやむと才子さいし戎あやむ試しむ  
濱瀨夫人あませ あいじん席せきと責あやむて佳人けいじんを與あそふ  
艷あざ之の佑すけ金澤文庫かねざわぶんこの印いんを纂あそる  
男女川おなめがわ御所谷ごしょや乃小吏こづかい戎あやむ開あそを

三之卷

第四齣

美女みよめ好男こうなん投奔とうほんと義ぎ戎あやむ完まるす  
痴人ちじん醉漢すいなん遊戯ゆうぎと笑わらを獻けんむ

第五齣



第六齣

路江身を朝夷奈此切通あしとみ陥おとす  
艶之佑血あまが鼻缺地藏あなに濺そくぐ

四之卷

第七齣

松風僂人十覽臺小奇あまを現あらむ

路江料兒鎌倉山あまに操あまが耀あます

伊三由比濱あまに擅あま拏あま印あまを賺あます

第八齣

三途河婆新居あまの談魔堂あまに荒あまむ

五之卷

第九齣

標峰檢技綽趣あまと劇場あまに説あま

艶之佑奇出あまと江湖上あまを玩あま

盤井唐士原あまに奇緑あまと結あまぬ

第十齣

高麗麗四郎花水橋あまに兄弟あまを物あまを

以上

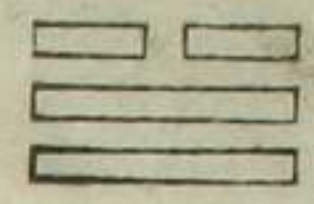
春編五卷

通計

四十齣四時合本二十卷

春笈秋冬春篇目次畢



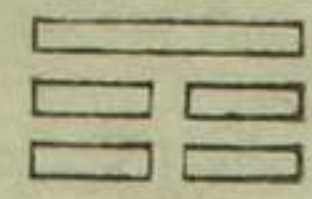


木配東其色青主春  
 八難之木陰也号萱  
 性女其德元其志怒  
 其声吁

路江



東遇春為肝臟  
 為尚書三生之  
 木陽也号青帝  
 龍王其音角出  
 双調声



澤田艶之佐

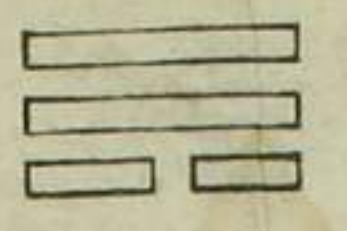


春

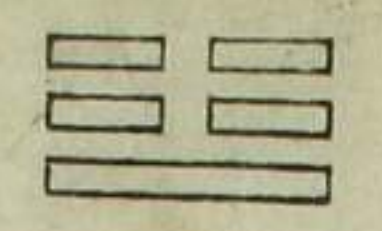


禮記卷之...

火配南其色赤主其  
二儀之火陰也号陽  
童女其德亨其志喜  
其声笑



盤井



南遇箕為心  
臟為帝君七  
陽之火陽也  
号赤帝龍王  
其音徵出黃  
鐘調

坂東三田五郎是業



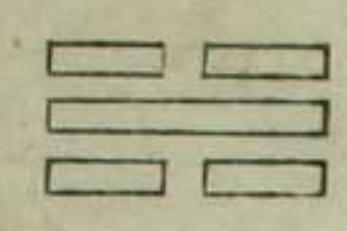


金配西  
其色白  
主秋  
四絕之金陰也号美勢女  
其德利其志憂其声哭

路里



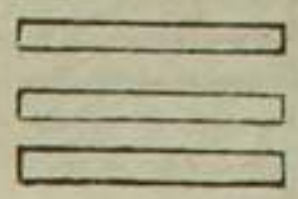
西遇秋為肺臟  
為將軍九厄之  
金陽也号白帝  
龍王其音高  
出平調声



男女川滝之助





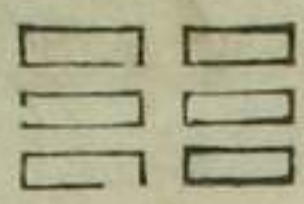


北<sup>ノ</sup>遇<sup>ノ</sup>又<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>為<sup>ノ</sup>賢<sup>ノ</sup>臟<sup>ノ</sup>  
為<sup>ノ</sup>列<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>德<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>  
水<sup>ノ</sup>陽<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>号<sup>ノ</sup>黑<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>  
龍<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>音<sup>ノ</sup>羽<sup>ノ</sup>出<sup>ノ</sup>  
盤<sup>ノ</sup>淺<sup>ノ</sup>調<sup>ノ</sup>

平<sup>ハ</sup>冢<sup>ツ</sup>高<sup>コ</sup>麗<sup>リ</sup>四<sup>シ</sup>郎<sup>ロ</sup>金<sup>キ</sup>孝<sup>コウ</sup>



水<sup>ノ</sup>配<sup>ノ</sup>北<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>色<sup>ノ</sup>黑<sup>ノ</sup>  
主<sup>ノ</sup>冬<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>害<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>  
陰<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>号<sup>ノ</sup>福<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>  
德<sup>ノ</sup>貞<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>志<sup>ノ</sup>恐<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>  
声<sup>ノ</sup>呻<sup>ノ</sup>



富<sup>ト</sup>里<sup>リ</sup>





附言

○凡全部二十卷每部四時二分至四帙トス春篇五冊稿ヲ脱ス續編遂テ可  
 嗣出也蓋名ツテ春笈秋冬ト曰クハイカ下チハ本ヲ攬テ披テ見ツヘシ  
 ○原是書皆寓言ナリ但事蹟ナシトイハ唐解元奇出シテ世ヲ玩フ故事ヲ以  
 証トス作者ノ本ツ所マツ易ノ乾天ヲ包坤地ヲ資テ黃帝龍王惠吉女ニ  
 效テ二個ノ夫妻ト作シ竟ニ八卦ノ人物ヲ生ス那ハ名ノ佳人才子各奇ヲ振  
 世ヲ驚驚シテ共ニ功勳ヲ立名義ヲ顯スニ件々アリ事ヲ成ニ至テハ之ヲ大虚ニ  
 飯スソレ易經開卷兩卦コレ乾坤ヲ震離巽ハ兒ハ男女タリ男女ノ剛柔ヲ  
 四時ノ配遇ニ撮テ以趣ヲ掲出シ終ニ場ノ奇聞ト成ス乾元亨利貞ノ  
 五冊ニ至ラハ自之貞正利アルヲ喻頌ル春秋ノ名義ヲ識ラシ觀者共ニ察諸  
 ○總テ事游戲ニ出テ殆劇本ニ類シ而モ正史ニ合ストイハ亦裨官者流ノ  
 遺意ナリ最猥雜ヲ厭スシテ鏡花水月頌アリ逆アリ實ニ善ヲ彰シ  
 惡ヲ瘴ル事切ニメ兒輩ノ哭ヲ止ム作者ノ本懐於是方暢タリコレ  
 江湖上ノ歌吹臺ニメ聊談笑ニ擬スル耳庶覽者コレヲ玩テ儻能  
 共向慕スル所ヲ知ラハ則一ツノ助ナラメヤハトソ

春笈秋冬春編卷之一

東都 振鷺亭主人著

第一回

江嶋丹壘之佐書画乃會を園也  
 七里濱小濱瀬夫人風流を競す



粵北條九京をま氏康ハ相別小田原不を味して感と遠近  
 震をば小田原ハ磐石乃地と高の輩初を驚て下  
 驅施盡んが於車ハ先祖早雲も紀より其了第一の街下  
 田薨之依とる人あり先祖ハ藤倉繁昌乃時代我本坐  
 出身して何豆相摸の心を一處に交わて後志く末料  
 一時巨萬の豪富とよむを以來北條家の軍用金と調進



連々不仕送中る由今艶之依代も到ても尚國主の顧面も家  
おまはかのづらう人乃用ひも重く粗考の鹿麿も因て家声の因  
傳とるるも艶之依素も聰明也豊饒も御學問天を  
色琴も我右也書どたは依を詩文を器風雅れ乃通せざるは  
艶之依かく富貴も満るるもあは生得て容貌清雅而粉と  
傳言が如く唇糸も吹雪るるごとく極て極東一乃艶男のしる  
途中におおて婦人過者も顧盼するそのむと名後るにめる  
榮花の身して今年二十歳の春迄も書を要ざる縁故ありその  
事情ハ四箇れ事あるなり其をといふハ

一ツハ  
二ツハ

刺繍剪裁小精く又能家来成麻房の貞女  
婦及の諸藝も悉く達且風流才知勝る奇女

三ツハ

三十二相奥よくもあはを暇なき玉乃美女

四ツハ

良人乃種子ほていまた男子も馴る處女

此四箇乃美譽一个を虧る事なく金も備るに申されは匹偶  
ならずとてふらぐ目も愛の何らばて後月日をどほる惣して  
世間乃女流大概貞と才と藝と兼るハ甚稀なるはかり後より  
永禄十年の春相別江の徳におおて天女法樂のこの書画乃會を  
置也あり艶之依もあはも振とて標峰檢校といふ琵琶法師を  
まもるひ小田原成慶にてやぐに信ふをよめてぬは標峰檢校と  
ハ曲藝の好もほて本琴といふものを工するが伯の通也といふ  
工もあらずさて此日江左坊とあ居停は諸國の達人衆の如く  
集しるるも艶之依ハ元より高名の才るる由筆を下せば千三

















其二

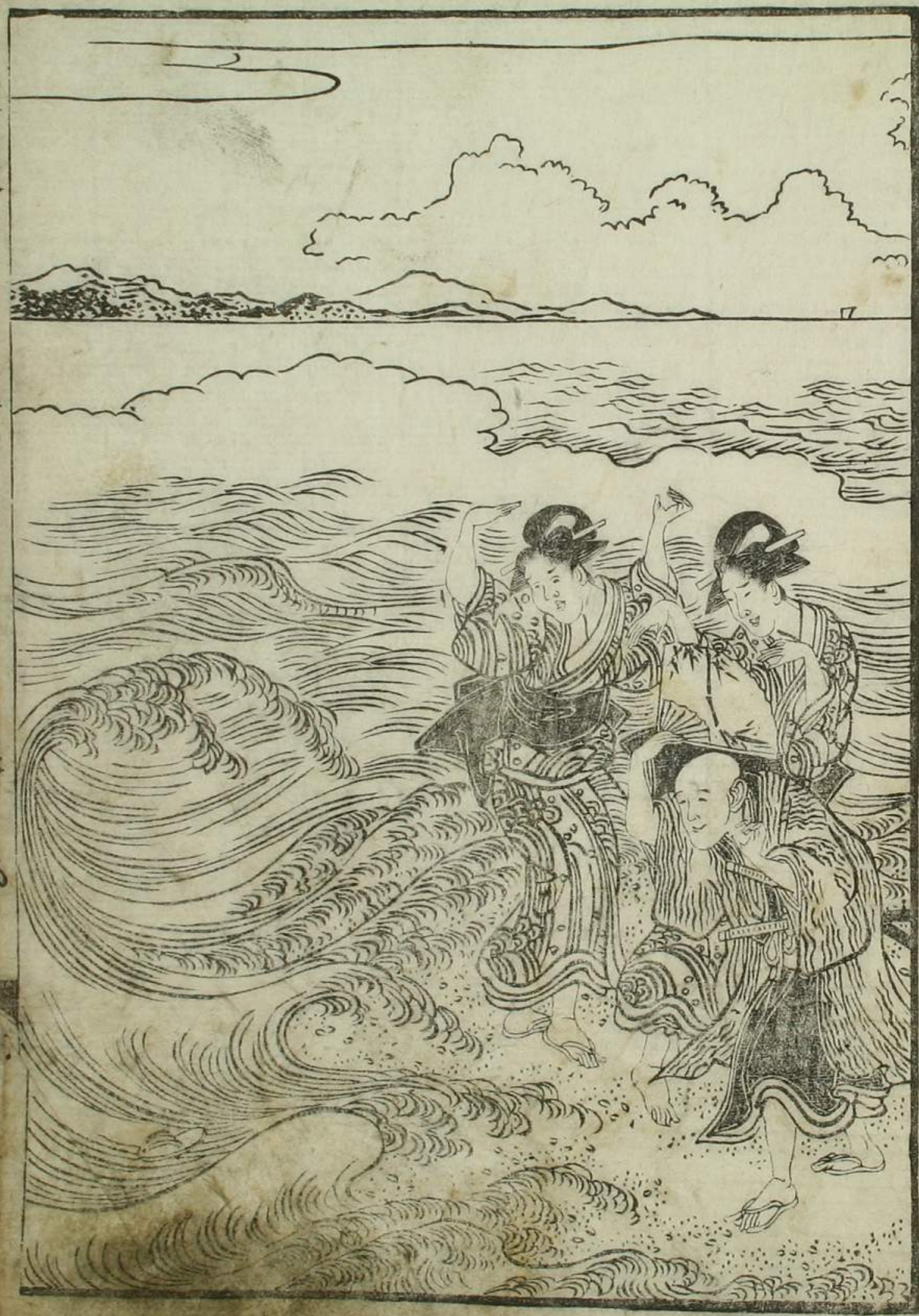
新編

卷之二

春之部

五





其三

春復秋夕

卷之一

春之節

六















まゝ窈妍清奇青絲の梳縮春雲を推し翠冠飄々惚惚  
 こゝろ香風十里も吹氣氤氳佳氣三霄小過ふ絶之依りて  
 見せしよく神蕩意揺て醉るが如く只呆たてて計りて六六の  
 雲北麓六七所の回潮乃今な時多るあればなる後路まで流る  
 悠揚して遠山成るまで進登る靴小一擁れ女鶴迹に九坊の前  
 りり髪之依り眼下成遇りたる正も是赤繩の繫るべき時節到る  
 もや髪之依り手に持てる吟箋の扇ふるものうちも情を落して  
 らずその路に肩を著て地より墜きり路にこの何事をもと頭  
 と回搦上をさるに艶之依り搦打し倚居て忽ち二人面成合せ  
 四目一こび見せて若小直下向上見せし見せし原より路に棟  
 こそ靴小媒妁ありて潘安が魏子建が才にありなど吹散るて

雲を訪ふよりて撫てさる九庸の俗ふるると嫌を平たさる  
 眼をゆり今日艶之依り風諷俊雅の人物りて成ていんを憶さん  
 たり満面は咲を帯て目をさるさる髪之依り路に今様小眼裏乃  
 語のやうなる成りてその蘇足の踏を足心く急ぎ搦と下り来り門  
 小出て忙しく身を躬めぬとてさる八某今不意の扇子とて  
 一簾忽のぬるまひ甚しき無れをいじりたりた唐突の罷と宿ま  
 こそ再三只顧小徳されバ路に尚向ふわくのとき男中の義人小屈  
 らして忽ち向差面を以て歎嘆て強の腐と偷しては何おさる  
 成は後ふや後けふと傷うりてを何いふさるさる事のみたんと  
 頻りに眸と凝して情を導す此時暮暉餘ハさる流流まふ  
 附率てさるは所とにさる路に忙しくその場を立去るを尚

春集秋夕 卷之二



七八遍頭を回してそのやぬ懸之依も又眼色を大く見て見よはるは路に  
 於て本院の門前にははるが又懸之依が面を顧み微晒て暖目せが遠小  
 一簇の中よまきれて音の門内よ進みぬこては本院とよの別院に  
 ま入祈禱さるじむる処より外向の紫の幕が張掃除奇麗なる  
 して簾綴乃管侍最者重なる光景なる此時艶之依ハ甚ごん送  
 く本院の門前よ中駒を待つ侍も彼路にさら小出されざるは只果  
 して又江左訪乃橋よ不飯をまやりのよど増橋檢校阿々と咲て云  
 公良久くいづと乃不桃洞か世を某推科とる小の春装秋を  
 次一堂中よ推んと相ひ控へにありや懸之依も又咲て某一枝の  
 花をもらる折びてく心よ易らずとひ侍る小奈何春装秋を  
 時小採獲る事やんや西の路又咲てふ一枝の花ハよの青衣の美人

を求めてよふたの九は精ハいふ不懸之依の果してあまの某今うの花を  
 一目にこそ急ぎ我魚の花よほて保たむおのふがいの不懸之依のい  
 の路にそ来たりの室よ對揚て韓城末玉よむとまて果ては偶々  
 且さうさるた此事容易よの懸之依と某金幣と厚  
 歴々の媒詢よ又挑んぬは花何なる折さる事やんや懸之依を  
 揺ていよと成就さるはよの懸之依の豪門富室日來と  
 求るもの多しとよともの四箇の女おのく心よ大さありて  
 等し況や浪遊主人堂中の玉れ如く籠を深はななく  
 故に返事率爾よしての遠初のみありは河の面目も  
 嘲弄と振く返驚と留買氣を廻され後よくゆえんとよふ懸之依は  
 ざる懼てよと思量してえらるの遠所見候字にて富貴小泥さる小



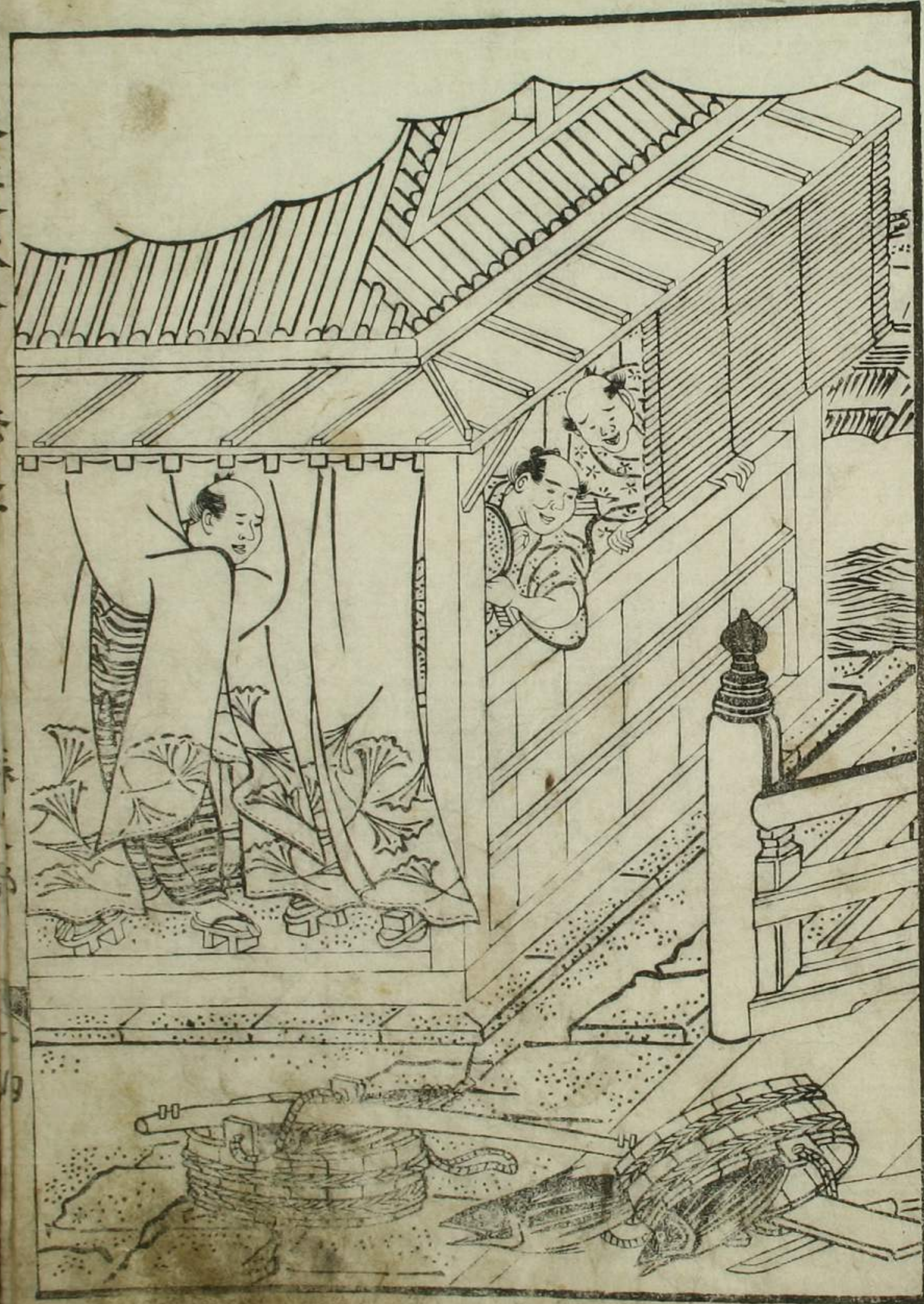
おどていせん某怪と数車と得んははる只頼ふんを愛て其  
 の一事は先生のいよき計較のバ示る事とん也探検が云某見  
 ふの場本より自列のまは探検張儀とて説きもも決て其  
 情と勘ごうとさそのり射頭好時の富貴おらげとよく  
 備て人よ配せんを某らふたずもあつ天を經て地成陣  
 く懸舟と懸一の場人成取のべきささこのまを成推さすお  
 のびはの高儀及びに怒之依のふ某いふおしての場成請の  
 ち事切なり先生良計をて我のめ懸一本意と返さむるお  
 の実小本業乃而目ありとまのめを申さしと拾とまべ  
 場路がのいの秋より望を托して壓つけおあふ金幣と用る  
 御守被が望お従て聘孔の厚薄おとす思宜く信を

渠を感じちむるいあを勝成去て逃くすは彼路にを撮ゆ小ハ  
 々々這般々と低言はる熱之依を拍て去甚奇多神様  
 算先生ハ殊小則龍捕氏とを欺は某おく乃とく急ぎ此  
 計成乃お道とて即高日夜と共高儀小およびハ何のよ計  
 ちんま是是標峰檢校が此意なりとハ後々小と聞入り  
 義且憑く高麗四郎深窓成謀る  
 身を抛て艶之佐闘争を促す

第二齣

かくて演漱夫人此信ふ九二十日あり泊留ありハ怒之依との用  
 宿ふ小本院の勤務者密はてすにも計畧の出をさき拵とる  
 ちが一夕傳後檢校車と旅館の探望小託て本院小の演漱  
 ま人の機嫌と伺ひて後さとの路江を傍なる處小招きて鑑















の奥買より起より人ををり遠より身を奥の相に致して云らるは我  
 の独て二三にバ惟ならず中分めん予路を信て通給此人云我の合  
 ねどもこれ今にせぬものあり你彼小同て彼を合せぬを踏と信て  
 奥買の惟小同のれや此人どう你我の中の力小同奥買と云て云い  
 とは六限もは你とてたして後時するさ身構と此人阿々と咲て云你我を  
 打んとも叶藤粉ぬるさ云とて答と振あ事吃耽つも区小の奥買ハ區  
 携を引勤て就小打てるもよと区に荷子次批て飛とどくに退去るは  
 ハ公番物をもてま運爽快して好漢ありと甚徳を思ひて即豪傑の荷  
 擔と辱と大名いふとるは此人答て云我ハ五平塚高麗四郎と  
 り者あり某果下成ん京野衣服の飾りもざるある人の名は此との  
 姓名を尊て某一臂の力を添中元聚は忙志く詳込て云ら某ハ

小田京れ者して澤田艶之佑希をのり傑小男中男一匹のよハ  
 義て承て某果下の高名成義ひて此下まで君のうぬ仔細の徳まいら  
 ても一大車あり豪傑のくは某を授まるとんや高麗四郎と云たあハ  
 果下ハ富貴の人ありかたわろ容成更ては死まで果下は容成乃東  
 也への有べし某が推河もあは人の傷とあはば一命を捨て若ハるの  
 ぶくその東成若給一歩も引かざる程之信が云実小者の見得るは  
 がうとて途途中るまは果下と告げしとて遠より高麗四郎と告るは戸指の  
 のえらうる小女小一座の酒肆あり程之佑信とて一献を酌中せん  
 と云らる小高麗四郎醉ていふ某ハ清白の豪傑あり何と人のに合  
 會せんや程之佑のいふ果下某が一大車を牽くはれ程と強て某が云は  
 せらるると即ち程之佑が食と挽て酒棧も登り坐置り処も故て酒



翁を備ふ二人を執て互に快歌をどほり時を遣はし依はるる劇  
 の侍女路にを意慮て此處までありたる我語を且いふ迄ては  
 及び東は懸念も必り高麗に節一義にも及びて云々は  
 路はいまい人の書るるを畢竟集の後集とて何の仔細あるは  
 ろう此の力を用ふ養わす某驪就領下の孫ありとも容易く  
 置れども美人乃情と撓事ハ如何なる十樊吟百馬獲を合しとも  
 カづく中を及ぶは只はうハ秋小一の苦計ありとて斃之依が身小つらく  
 低言如くはとと云圖む斃之依大よ喜びてあるは神妙の計あり  
 明日の行の強はそその夜ハ此酒樓におあて飲明兩人胸中の  
 東は強りくはと云圖む斃之依大よ喜びてあるは神妙の計あり

春集秋冬卷之一畢

伊勢茂



